

神楽名

おくむら 奥村神楽

伝承地

奥村地区
椎葉村大字下福良奥村

指定等

国指定重要無形民俗文化財

伝承団体

奥村神楽保存会
代表 那須 辰夫



大神

◆ 神楽の概要・由来・その他

奥村地区は、椎葉村の北部、南流する十根川流域^{とねがわ}に位置する世帯数14戸の集落であり古くは五人の平家の落人より開かれたと伝えられる。その落人の中の一人である白ノ本^{ひのもと}次郎は天正二年（1574）に、集落内に浄土真宗明林寺を創始した白ノ本^{ひのともみそら}三十良の祖父にあたと云われている。

奥村神楽は集落の氏神さまの祭りで、家内安全、五穀豊穰、集落の安全を願い奉納される。明林寺に棲んでいた蛇が祀られている木森^{きもり}大明神と、行者が修行したという山中の白岩に天狗面をまつる白岩大明神を氏神さまとしている。夜神楽の「りょうちしん様」では木森さまと白岩さまの2面が登場し、弊を手に刀をさして共に舞ったと云う。住民は神社の氏子でありまた寺院の門徒でもある。

以前は2軒の民家が交代で神楽宿となり、三十三番が夜通し奉納されていた。面を着け女装などをした「道化^{どうけ}」が御神屋^{みこうや}の周りでおどけて舞い、見学客を笑わせた。村人によるせり歌や囃しなども飛び交い賑やかであった。楽は七調子、軽快なリズムの太鼓と神楽歌に合わせた舞が特徴である。

◆ 芸能の機会・場所

- 奥村神楽… 11月の第3日曜に、奥村集会センターにて「式三番^{しきさんばん}」を奉納
以前は旧暦5月14日の夏祭りにも神楽が奉納されていた

◆ 演目一覧

あんなか

にちげつ
日月

大神

※平成27年11月に奉納された演目に基づく

その他に「白岩様」「荒神」「稻荷」「火の神」「柴引き」等の演目が、現在も伝承されている

◆ 演目の特徴

「あんなか」では、山盛りのご飯を白紙で覆い箸を添えた膳が、着座した二人の舞い手の前に据えられる。唱教が唱和され、舞い手は箸で白紙を外し、その紙でご飯を包み盆の端に載せる。「福ゆずりしよう」の言い句で膳を手渡し、鈴と扇を手にとり舞い始める。「日月」は白紙の宝冠に鉢巻をつけ、白の舞衣・袴による二人舞である。太鼓の激しいリズムに唱教が唱えられ、舞い手は鈴と扇を持ち立ち上がる。はじめは閉扇で、次に扇を開いてひらひらと振りながら神楽歌にあわせて舞う。後半は米をのせた盆を採り物とし、最後は四方に米を撒いて舞納める。夜神楽の演目にある「柴引き」は着面の舞で、御神屋の周りを太夫と共に一舞した後に舞い込み、太夫と柴(榊枝)を引き合う。榊枝は後ろ手に三回引き、三回目に太夫の手から引取り、山の主を尋ねる唄をうたう。続いて榊枝を手に採り、鈴を振り舞う。

◆ その他の特徴

- 面... 荒神面、稻荷面、柴引き 等
- 楽... 太鼓(以前は笛、鉦も加わった)
- 装束... 白い舞衣、袴、天冠 等
- 採り物... 御幣、面棒、扇、鈴、刀、弓、矢、櫛、盆 等
- 文書... 昭和35年に書き写された「御高屋誉神楽」や「ありなが神のう」など唱教を記したものが保管されている

◆ 伝承の現状・課題

平成13年頃までは夜神楽が奉納されていたが、現在は「式三番」と称される神事的要素の強い神迎いの3演目を奉納する日神楽となっている。不幸ごとにより神楽が中止になることも多く、高齢化による後継者不足のため、継承が厳しい状況である。



あんなか



日月



大神